

菲菁集

札幌青磁社
土屋文明著



菲菁集

土屋文明著

札幌
社磁青

● 定價七圓（稅共）



菲菁集

菲菁集

土屋文明著

札幌青磁社
土屋文明著

◎定價七圓(稅共)

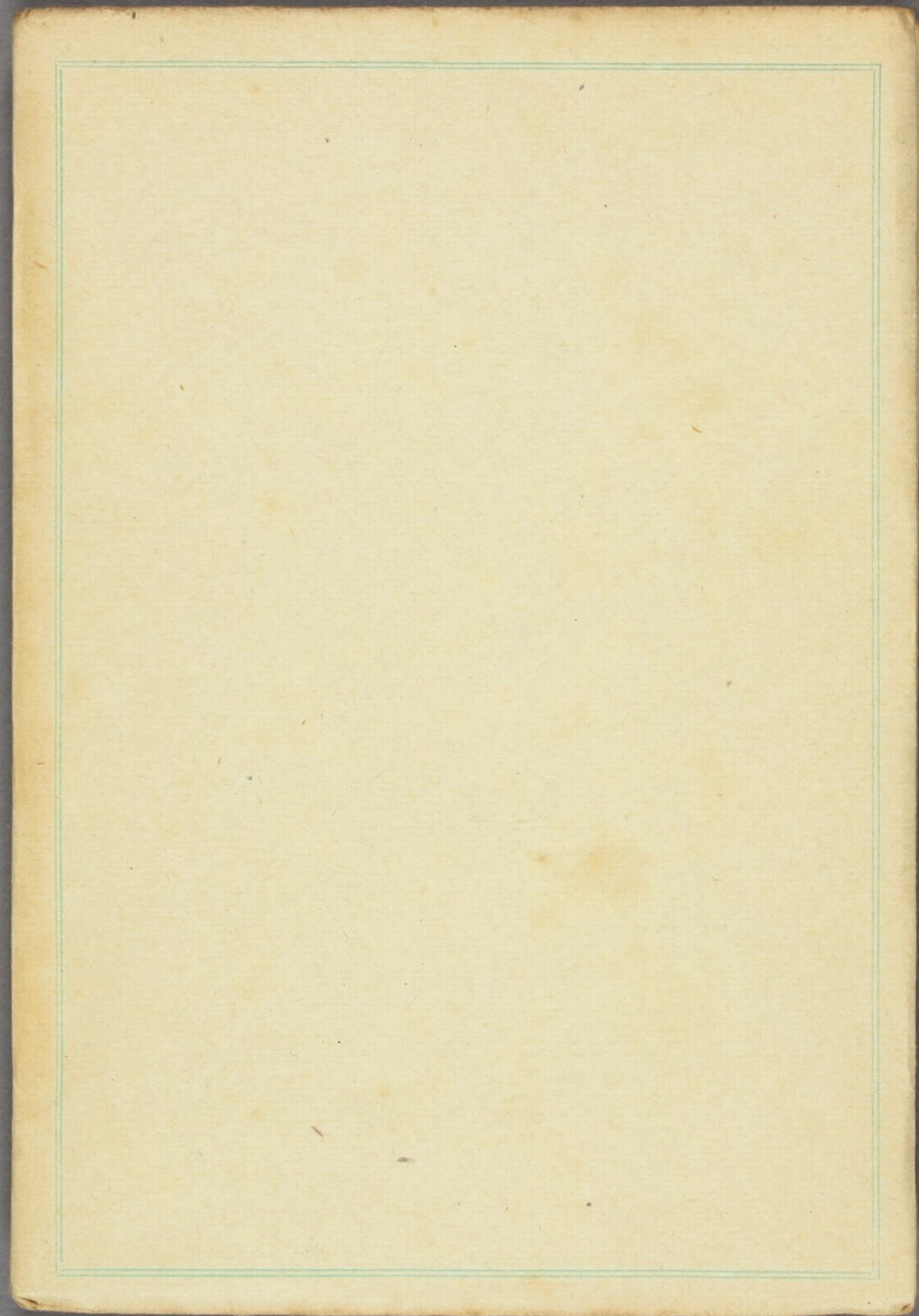
札幌青磁社

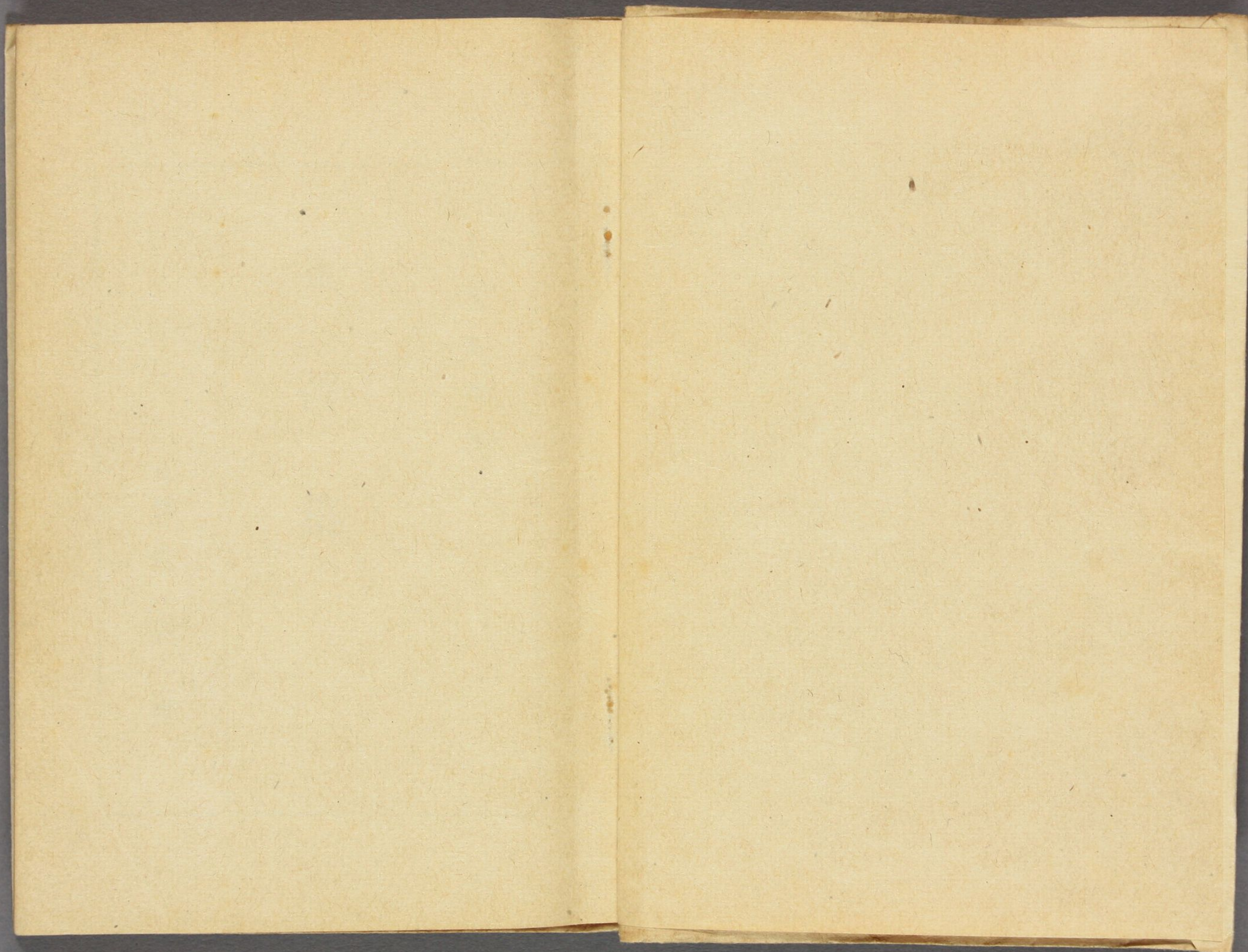


菲菁集

菲菁集

土屋文明著





土屋文明著

菲
菁
集

札幌青磁社

菲菁集目次

北京雜詠	三
長蘆鹽田	三五
蒙疆行	三七
北京張家口	二七
張家口	三五
張家口大同	三六
大同雲岡	三八
大同厚和	四四

厚和淹留	四七
黄河の賦	四七
山西河南	四六
大同太原 太原數日	四六
太原石門	四七
石門開封再賦黄河	四七
開封	四七
南京雜歌	四八
江南雜詠	四八
蘇州	四八

上海	九五
杭州	九九
南京雨花台	一〇〇
江北山東雜詠	一〇四
天津淹留險	一三三
天津着	一三三
太沽鹽田見學	一三三
相澤正君戰死の報	一三八
天津市中	一四〇
國際クラブ	一四三

菲菁集

昭和十九年七月乃至十一月

續南京雜歌……………一三五
續北京雜詠……………一三九

北京雜詠

方を劃すはうくわく黄なるわうなる蕘のいっひやく幾百ぞ一團のうはぐすり釉うらだん 熔けて沸たぎらむとす

紫禁城しきんじやうを除のぞきて大方木立おほかたてしだちげり青吹あをふく風ふうに樓門ろうもん浮かぶ

はてしなき青あおき國原くにはら四方よもを限り城門じやうもんあり北京ぺきんあり

城門より遙かにしてなびく煙一つ風は通州に到るなるべし

閉ざしたる蓮に夕日つよくして尖りし紅數かざりなし

塔白く寺廢れ蓮華たなびけり虚空にまがふ荷葉のかがやき

蓮葉の夕べ綠青にしづめるも濁れる水を覆ひつくさず

簾たれて西日ふせげる畫舫の中人ただ臭く蓮ただ紅し

若き夫婦臭き中に立ち美しく畫舫の上にその子を愛す

つつましく椅子に並べる少女二人吾に答へて清き支那音

楊蔭涼しき池の西側を人等つれ立ち歸り行く見ゆ

昨日きのふ見て今日こんにち群衆ぐんしゆうに紛れまぎざる險けはしき容かたちは南方なんぱうより來る

半白はんぱくの髪かみをたがねて翁おきな出づ蒙古もうこ繪卷ゑまきに見し者ならずや

うさぎ馬煤うまばいを車くるまし來るなり煤ばいより黒くして眼まなこあるもの

車よりこぼるる煤ばいは煙けいに立ち鞭むちと聲こゑとは驢ろのしりを打つ

蓮はすの實ひとたばを一束買ひて下げたればしたたる水は晝舂くわばうをぬらす

菱わさびの實こののこの大さも思ひ見よかまはず割わつて鏽さびのまま包む

父子おやこあり楊やなぎの下に机立にひひして新菱にひひしの實をを鋏はさみにて切る

若者わかものの割る菱のの實をを蓮はすの葉に一つかみづつ包みては賣る

食ふもの未だ盡きねば花閉ぢし池の園生に人群れて入る

限りなき西南に白き雲浮かび物語る李自成のやからとも見ゆ

此の院子冷々として胡同にほこりを上げ煤をたくはへしむ

汗に寝て秋まぢがたき胡同の者等にほこり浴みせ煤運ぶところ

物と價を判つ國人の心さけり堆く持ちむさぼりて賣る

白絹に緋の絲刺せる鞋並べば吾が家の三人の少女等思ほゆ

絹鞋にみどりの赤き絲刺せり天平勝寶八歳思ひいづ

教へられし如く値段を争ひて廣韻一部つひに手に持つ

朝あしたよりすど鋭とどきを國おんじやうの音聲おんじやうとも壁かべに住すむ者もののこたまともさく

夜よる深く面おもてにあたる熱氣ねつきあり感かんずるは槐ゑいしの花はなの香かか

夕日ゆふひつよく楊やなぎにさせる勢いきほひに秋あきの色いろすでになきにしもあらず

汗あせに溺おぼるる目をふさながら少女をとめ答こたふ日本にほんの言葉ことばやさしいつくし

此こゝの宿しゆくを小こさき日本にほんと歸かへるなり少女をとめ等のひびく日本にほん語ごの中ちゆう

夜々よるよるを日本にほんの壘たみに長ながく寢ねて其そのの夜々よるよるの濱木綿はまゆふの花はな

石灰せっかいぬる幹みきに親おしみがたけれど槐花ゑいしはな匂におひアカシヤの莢さやしなやかなり

あくまでも蓮れんの紅くれない愛あいづる國くに彼岸ひがんに寄よせず愛憐あいにれんに寄よす

蓮池は直ちに瑞雲ずいうんに通へども來迎らいがうを描かず慈姑くわむのもろき花を寫す

横はる吾は玉中ぎよくちゆうの蟲にして琥珀こはくの色の長き朝焼け

じりじりと熱くなるのを窓下は磚せんのほとりの朝のこぼろぎ

石榴ざくろに交はる花の夾竹桃けふちくたう白きを選ぶ大學校なれば

蓖麻ひまを植ゑ玉蜀黍たうもろこし植ゑ日本の如くなれど又煙草すうじふぼん植ゑ數十本

中庭なかにに南瓜かぼちやしご四五本ほんうゑしめし先生の心を吾は敬みやまふ

窓下の南瓜は照る日にしなへれど蟬多からずひびくよろしも

日になびく柳やなぎに蘇よみがへり汗をふく櫻さくらに似たる榆にれのしだり枝え

移る時に移らぬ清き心二つ見しのみにして今夕安けし

栝くわつのはだへ白々しろしろ漏るる日光ひかげありて槐ゑいの風は秋を思はしむ

枯れ立てる南芥菜なたぎをの角かくも大形おほがたなり縞あざやかに蝸牛かたつむりあり

甲よろひたる背を高めつつ死にてあり踏み試みるどぶ針鼠

道焼けて生きたるものを行かしめず人間にんげんあり速くゆきのろくゆく

ひさげ来る圓七ゑんび假鍬かちゆうの光あり悠々ゆうゆうたる君子は糞負人ふんぶにん

ぬば玉のさし羽扇あふぎてなつき来る若きは仙せんなりや麥酒ばくしゆを售うらむ

この國の色ある氷前こほりにして首細ほそき少女をとめ顎張あごれる壯士をとこ

胡同ほうとんより幾重いくじゆうにも汚濁をちよくさへぎりて白麻衣しろあさごころも涼し氣高し

銅鑛どうくわうなき國にして銅どうの盡つくさぬこと南酒なんしゆだい第一いつびん北京へくきやうに到ること

走りつつ立あつつ鼻なひる衢ちまた來て柔かろかに詩韻しゐんを談る

回くわいの煮にる鍋なべをのぞきて曲まり行いけば奶酪ないらう冷ひやえし喫茶きつさ處じよあり

雲南うんなんの大理だいりの石いしを此所こゝに積たみて華表くわへうはなびく青雲あをぐもの中

白しろき石いし照てるをかへすに眩めまひして白日はくじつの下もと夢幻むげんにあそぶ

白雲しろくもに交まじはる壇だんの大理石きか幾何學かくてきま的規矩きく直ちちに空想くうさうを呼よぶ

生なふるもの絶たえたる壇だんを下くだり來きて汗あせは落おつゑのころ草くさの穂ほの中

疊み上げし壇ただ石の白くして吾を包む空氣百二十度を越えぬべし

本草ほんざうに描えがける如ごとき荒あ々あしき缺けつ刻こくの蓬よもぎ踏ふみつゞぞ行く

どんざいに太おき毛け描えがきし莖かきなども今いま知しる真まなる此この國くに出しゅ品つひんの寫しや生せい

吾わがが丈たけに及およべる莧ひぬを分わけ行いきまつな松ま菜な一ひと株かぶ天てん壇だんの下もと

紺こん青じやうの流ながるる薨たんも丹たん壁べきも一ひとつになしてたただ強ひき日ひ光かげ

そに鳥あの青あ色いろ衣ころも自お轉ま車ぐるまにて少せ女にょは來きる新あしき時とき代だい

少せ女にょ等らの步ほ幅はば大おきく來きるなり新あしき代よの片ひとひららころも

飾かりなき薄うす花はな色いろの木も綿めん着きて步あ調てうとり少せ女にょ等ら健けんかに行いく

人麿の歌のこころを姑娘くわにやんより問はれしといふ話もよろし

工場に働く中國の少女等は新しき教養あり君に親しむ

肱ながえはりて上げたる轆ながえかがやけど被かうむらず着はずわづかに履はけり

横しまに國の力を盡しつつ玻璃はりに拙はき蘭あはれなり

浮かびたる一片ひとひらの紅あけに及しかずとも力を集め雲に入る塔を起す

園その二つ荒れたる方に心寄せ泉いづみを掬すくふ日本の吾等

泉の草夏に衰ふるありさまも小さき水田みづたも心親しも

園すた廢れかがやく丹青塔たんせいにあり邊あたりかまはず玉蜀黍とうもろこしさび粟あわを植うえ

此の鬚ひげは帖木兒汗ちむうるかんに通ふべし衡はかりして賣る黒き饅頭まんとう

一わたり賣りたる鍋なべに溝みぞの水汲み足して荷にをかつぎ去りゆく

門前もんぜんに食くらふにぎはひの暫あやして天下てんか第一だいいつせんしり泉尻いづせんしり流れゐる

白はき蓮ちすい稻田いなた限りて咲く親おやし城門やなぎいでし楊にれと榆にれの道

カーペット踏ふみ西洋鍵孔かぎあなの奥おくにして大おほに日本文化にほんぶんかを論ろんず

物もの乏なげしき東京とうきょうのことなど言いふ聞ききて飯店はんてんの氣水きすゐに喉のどをうるほす

熱氣ねつきたつ衢ちまたにあそぶ童子どうじ等の降ふり來きる雨あめを諸手もろてして受うく

盛さかなる槐えいの花はなに雨あめふりて甘あまき香かは雨あめの中なかよりさこゆ

乾きさり觸るるもの皆熱かりき慈雨じゆうといふ詞を今ぞ知る

葉をつけし冬瓜とうぐわんを賣る朝の市國いち古くして清すがしさを見る

煤ばいを挽くうさぎ馬も馬を追ふ者も洗はれて清々あめあとし雨後の今朝

塵洗はれ人等親しき今朝ちまたじゆうわうの衢縦横に槐の花咲きあふる

長蘆鹽田

口づから霧ふきて車童しゃどうすぐるさへ涼しと思ふ鹽田えんでんち地に入る

墓冢はかつかと見ゆるも泥屋でいせくの形せるも白だいじやくわくき大城郭も皆鹽なり

帆を集め風車ふうしゃに水を上ぐるあり赤煉瓦は電動ポンプ處と見ゆ

鹽田あり山と横伏す鹽ありてはたては白雲遂に海を見ず

自ら凝る鹽の原に牛を曳く恰も春の雪蹴るがごと

蒙 疆 行

七月二十八日 北京張家口

白き家鴨群るる堀あり朝の水汲む部落あり城壁の外

護城河に湛ふる雨水家鴨群れて北より蹄の來る音もなし

畔あせの上に向ひ合ひ朝飯あさいひを食くふ夫婦粟ふうふの葉は少し露もてるらし

高粱かうりやんを前にしやがめる全裸ぜんら人文字じんもんじ發明はつめいの朝思あしたほゆ

前かがみの首手足不釣合かふこつに長くみゆ甲骨かふこつなどの形象けいしやうなりや

岩山いはやまに羊追くわしやふ童子火車くわしやを見ず谷はやうやく深くなりゆく

臭椿しうちんに紅燃ゆる實の見えぬ居庸關きよゆうくわん址あとに氣をつけ行けば

望樓ぼうろうより望樓ちやうじやうに登のぼる長城せんの磚せん新しく足にひびくなり

磚せんの間に生えたる草は何々ひぞ檜扇あふぎあやめ未だ花咲かず

胸壁きようへきより見下す傾斜かたむちに畑はたけ作る草を切りて僅かに黍ある畑

世の音のここに聞えねば長城の冷えたる磚にしばしまどろむ

三〇

嶺をこえ谷を渡りて鷹揚おうえうなる長城のうねり日は強く照る

利己りこのみの民といふなかれ此かくまでに力を集め國土こくどを守る

聞きしごと今見る長城に驚かねどゆとりある起伏きふくは貶おとしめがたし

墩臺とんだいの磚残りつつそれをつなぐ土城どじやうのくづれ古き長城と見ゆ

年を経て苔なき磚も照りつくる日熱くして感傷かんしやうにいとまなし

或る所は重なる磚の嶮しさを登りつつ行く望樓に向きこて

望樓は登るに更に高さあり雲居る山も並び立つなり

三一

飛燕草碧ひえんさうきを活けて隧道つみだうを守る人等に別れ來にけり

山下やましたの縣城けんじやうめぐる雷雨の川高き濁りは火車くわしやをさへぎる

乾きたる草野に濁りまはる間列車あひだとどまり減水げんすゐを待つ

止まれる列車くだを下り草村に蜜蜂を打つ支那少年と

すばやく藁をかへして蟲をとる少年白哲はくせきの面おもてよごれたり

垢づける面にかがやく目の光民族の聰明そうめいを少年に見る

吾が示すえんまこほろぎ早く捕へ草になげうつ笑みも愛らし

雨すぎて蜜蜂ひそむ棗原甲蟲なつめはらかぶとむし一つ飛ぶ夕日の中に

静かなる楊やなぎの末の夕ひかり山には残る白雲しろくもの見ゆ

塔形たふがたの山あり麓ふもとに廟べらうありその手前に廢屋はいせきあり

廣き野の緑は明暗めいあん異にして高粱畑こうりやうにさしこむ夕日

洗はれし如くに立てる山一つ縣城出しゆつするで出水しゆつするの川にさわぐ民

いちじるくコークスを焼く夜の製鐵所長き磚城せんじやう火力發電所

二十九日 張家口

雷雨すぎし山に短き草の色春の如きを汗ながし見る

方形はうけいの望樓ぼうろう一つ高くして岩骨がんこつにただちに草生ふる山

草乾く原出水の川越え來り青き茂りの蒙疆あり

列なして大境門だいきやうもんを入り來る駱駝らくだの群は映畫にて見る

乳形ちちがたになれる葡萄の青房あをふさも心にしみぬ冬寒き國

三十日 張家口大同

行き行きて榆にれと楊やなぎと盡くるなし榆と楊には即ち家あり

雨すぎて黄なる地隙ちげきにさす夕日地殼ちかく新に成りし日のごと

鮮あざやかに黄土くわうどは青野あそを斷ち割さきて限なき地隙遙かか下方はうに相集あひあつまる

大きな蕪あざみも時に心ひくあまねく短き草原にして

山に沿ひ山の麓の長城に従ひゆきて夜にならむとす

三十一日八月一日 大同雲岡

馬うまと驢ろと騾らとの別わかちを聞き知りて驢來り騾來り馬ま來り騾と驢と來る

牛と驢が騾と驢が馬うまと牛が曳く車つづきて絶えざる朝あさの市

漑塵がいじんと掲かかげし意味を考へつつ行きて菊千代の看板につきあたる

雷雨あり華嚴寺けごんじの道ゆきがたし高さをまはれば糞くそ新しく

煤すすしたる天蓋てんがいになじむ赤あけの色常に美しき赤をぞ仰ぐ

武州川ぶしゅうがはの濁りにそそぐ幾つかの澤水さしみづ澄めり戀ひ戀ひてゆく

下り立ちて伊吹麝香草の匂つよき畔めぐりつつ黍畑を見る

高粱の黒穂のいたく氣になるも旅を來りて心よわれか

ここにして心親しく澄む水の澤の水上也も思ほゆるかも

此の崖に幾萬の佛こもりつつ窟に龕に雨は吹きあつ

ははき草雨にしなひて一面に窟の前を覆ひつくせり

日本の薺に異なりと思ひながら薺の實踏み窟に出で入る

龕高き羅睺羅愛撫の像にのこる古りにし朱を立ちかへり見つ

蓮の花いまだふふめる持つ尊者ゆたかなる笑は人間にあり

大きな佛ほとけをめぐる小ちさき佛ほとけ最もつとも小ちさきは手てに觸ふれて撫なづ

この窟くつは在ありたる王わうを寫うつし出でてたけき命いのちはいまも見みること

北方ほくほうの顔かほ長ながき王わうを生いき寫うつし佛ほとけによらぬ佛ほとけ今いまに生なきて見みゆ

大きな城しろに王わうとししみて來きる願ねがひを石いしに像かたち彫ひりたり

この窟くつは住すみたる人ひとの跡あとありて輓ひき臼うす一つのこる親おやしも

吹ふきつくる雨あめに濡ぬれゆく佛ほとけあり千ち年とせの雨あめに残のこりいましし

崖がけの上うへ磚せん崩くずれたる廟でうありてかかはりもなく雨あめに濡ぬれてゐる

草くさ生なひて住すまざるごとごとき屋や々々に幾いく筋すぢも煙けぶり立たつ雷らい雨うとなれば

八月二日 大同厚和

四四

枯れ立てる大葉おほはざしぎし時に見えて世田谷せたがやの道思ひいでつも

長城を過ぎ來て墩臺とんだいのつくるなし山脈さんみやくつづく限り墩臺つづく

此の土につきて離れぬ民ありて墩臺の跡つづき鐵路てつろゆく

さし來る海の潮うしほを見るごとし草に切り入る民族の力

草原くさはらを切り耕して植ゑたれば残るは草短き石多き原

野の花のあくまでも濃き色の中青淡あをあはあは々し亞麻あまの花畑はなはた

見ゝかぎり低き草山やま葎ゆらの畑は白味しろみをもちて貼はりたる如し

四五

菰も粟もそばも見なれて行き行けば小麦は親しいまだ青き穂

鹽を煮る湖といへども岸の草青くしづまるに沿ひつつぞ行く

芥子けしの花残るところも幾度いくたびか過ぎ色ある花の見ゆるあはれさ

稀まれに見る道は青野あそに入りゆけば何處いづくに到る草丘くさおかと雲

ただの野も列車止まれば人間にんげんあり人間あれば必ず食ふ物を賣る

八月上旬 厚和淹留

鶏頭けいとうの朝々さゆる八月にシャツ重ね著て東京を思ふ

道のべに水わき流れえび棲すめば心は和なぎて綏遠すゐえんにあり

なれて巻く朝の脚絆きやはんの整ふを喜びとして遠く到りぬ

立秋りつしうの前の日の風野分のわきだち幼児をまなごを毛布けふしに包む婦人等ふじんら

白楊びやくやうの並木なみき行き來の人の夏衣野分なつごころものわきはかへる新城舊城の間しんじやうきやうじやうあひだ

西吹きしやうふきと一日いちにちの後燕飛のちのつばねはず綏遠鼓樓すゐえんころう静まりて立つ

杆てこを据すゑる麵めんを押し出し煮つつ賣うる綏遠城大街人すゐえんじやうたいがい樂しめり

煮いえたぎる油あぶらに餅もちを投げ入れて勢いきほひをつけ鞆ふいごを煽あふる

髪かみ少し額ひたいに立てし唐子からこにて樺かは似つかはしき金盞花きんせんくわ一つ

葱ねぎ二本味噌あじは器けがを汚けがすほど纏足てんそくあやふく道を横よこぎる

若き代はここにもありて髪直ぐに目見高くして秋の日を行く

高粱の古幹を車し來り賣る綏遠城内雲をこひ思ふ

陰山の中廣らなる平あり川澄みて土壁小さき縣城

澄みきはまり黒ずむまでの天の下花みな碧き陰山を越ゆ

この川に水の澄めれば石に居て衣をたたく女もしたし

陰山を高く越え來て陰山のはてなき草の起伏に向ふ

吾が友等行きし蒙古は更に遠し地に近き天やや白く見ゆ

松蟲草ただ一本の白花を陰山の往來に吾はともしむ

五二
圍壁崩れし歸化舊城に流れ込む賑ひは門閉ざす喇嘛寺の前

賣れる物蒙漢回を雜へたれど群がり來る容やや同じ

大きなる銅を傾け茶を注ぐ飽くまで食らひ飽くまで飲む人等

油の香胸につかへて暑き路地ゆたかに並べ人皆食らふ

日の下によごれし者等集りて樂しみ聲あげ樂しみ食らふ

乾棗山査子海棠杏等蠅を散らして其の物を知る

手に取りて吾は驚く乾ししもの信濃柿又山形關根柿の類

纏足の母をとりまくよき娘ひそひそと向日葵食ひ居るを見つ

煙毒えんどくに減りゆく民を嘆き言ひき老總管らうそうくわんに通譯して問へば

文化なき終つひに亡びし幾民族其の地に來り聞くは身にしむ

歡喜天くわんぎてん一つ残して廢すたれたれば蓬よもぎは高く陶瓦たうぐわつやつやし

藏文ざうぶんの聖教しやうけう一枚手にとりて又屋根土の落ちし上に置く

西域せいみほくを出でたる駱駝泉傳らくだせんひ此の城に來し道も聞きたり

限りなき紅楊こうやうの林炭りんたんに燒き天山てんざんの道君は行くといふ

紅楊を君は示せりむらさきの花穗きよらう美しき檉柳きやうりうのひと東たば

この國の硬かたき水をも軟やはらめて火車くわしや西に行く日を吾は待つ

めぐり立つ陰山の所々夕日かけとどまるを見て鼓樓ころうに上る

五六

西南たくと托克托の方に黄河ありと涯なくた靡なびく夕べの光

見下ろせる院子りんず瓶かめ多く並べるあり駱駝とう五六頭うづくまるあり

赤々と炎を上げし家ありて城内じやうないの夜となりたるを知る

黄河の賦

ほこり立て羊群ひつじむれうつる草原くさはらあり黄河くわうがの方はやや低く見ゆ

ああ白き藻の花の咲く水に逢ふかわける國を長く來にけり

青き國に岸なき水のよどみたり光かすかに夕べの黄河

五七

近く来てゆるやかなる流の音きこゆ瀬波に入りし島のごとき芥

親しみ來し陰山ここに終る見えて雲とも煙とも黄河の來る方

オルドスの起き伏して赤き山並に黒きところは雲のかげらし

今見るは勢減りかけし水嵩にて西藏雪水の終りなりといふ

西藏の山に溶けたる雪水の削りて行きし岸三百餘メートル

七月に雪水到り甘肅の雨水は到る九月なかばごろ

こぎ出でていよいよ廣き大黄河しぶきを立てて瀬を越えむとす

目の前に黄ににざる河の水は夏の日さらひ蜃氣樓なす

渡りゆき上るのぼる渡口とこうの沙原すなはらに駱駝らくた牛驢ろば馬ば今煮にえし小米飯せうまいはん

六〇

大黄河ただ渡り來て沙原に伸ぶる杉菜すぎなのやはらかく見ゆ

香かを立てて青草あそくさもやし茶をわかす漢蒙混りあふ渡口とこうの晝すぎ

箱舟はこぶねに袋も豚も投げ入れて落ちたる豚は黄河を泳およぐ

赤あかき上衣目うはぎに立つ蒙古棹もうこさとりて箱舟は今中流ちゅうりゅうにあり

かもめと思ふ鳥一つ舞ひ暑き日を限りなく流す黄なる河波かはなみ

オルドスを來りし駱駝荷をおろし一つ箱舟の渡す時待つ

包頭ほうとうは坂ある町の夕日さして其のうしろ後にうごくつむじ風あり

六一

日の下したに白き虹にじとも見るまでに煙けぶりをあげ旋風つむじのろく移る

城壁に沿ひて坂見ゆる土の町遠き西域に通ふ感じなり

蘭州らんしゅうより少し減り来る水嵩みづかさも流木りゅうぼくを見ずといふも心うつ

オルドスに今朝居る雲もその影も昨日見たるにいくらも變らず

ま近くに黄河見え居る曹達さうだの原色はらづく草に今朝はちどろく

山西河南

八月十九日 大同太原 太原數日

朔さくを過ぎ古き長城のあとを越え南にくだる一日長しいちにち

蔓たてる豆の畑は平凡にて見るに飽くなし新たなる國

審武縣ねいぶけんに幾代いくよの城の残る見て瀑布ばくふかかれる谷をも過ぎつ

牛車うしぐるまの後を追ひつつ骸炭がいたんを負ひたる驢馬ろばの尻ふりて行く

陰山に見たりし薊列車あざみ高くめぐりゆくときあふはなつかし

秋空に並ぶ雙塔さうたふ遠からず物を賣り物を食じやうぐわいひ城外じやうぐわいなほ人あり

一夜ひとよまち二十分あひし若き友覺悟を言ひ工場にかへり行く

六六

槐みにしおいき老木蔭の公署こうしよに枕ふたつ歸らぬ主あるじをなほ待つごとし

寢臺しんだいはひろくゆたけくありし日の如く残りて歸り來ぬ者

湧く水に民の集る祭見つゆたかなるかな食ひて遊びて楽しむ

食ひすてし西瓜すあくわの上うへにのびあがり劇中げきちゆうの公主こうしゆに心寄するさま

再び咲く槐みにしの花はなの花蔭はなかげに賑はふ祭あきて歸へるなり

太原のひがしの山にゆふ日てる赤城麓あかぎふもとを錯覺さくかくせしむ

二十四日 太原石門

六七

林檎りんごの樹きたわわに實みのる榆次ゆじすぎて丘はやうやく草絶えむとす

耕して天てんにいたると傳へしもここには草なき白き丘となる

白き丘頂ならべ粟なびく松し四五本ごほんはしたしく思ほゆ

萩の花青き柿の實目につきて日本の村を思はしめつつ

莖立てる蕎麥の畑に並びつつ二葉ふたばに萌えし青菜あをなの畑はたけ

切岸きりぎしに石炭せきたんの層そうを見ることがあり運び積み上げしに逢ふことあり

つきて來し治河ちかの支流しりうの谷狭たにくきはまりて今娘子關ちゅうしをくわんをすく

磚せんの道めぐりて登るさまも見え白衣はくし一人關門くわんもんの前に立つ

兩側の家ひくくして關口の開ける所見とほしに見ゆ

七〇

谷狭み湧く眞清水の兩岸よりしばし流れて濁りにまじる

屋上に穀を打ち居る村多く國ひろくなり河北に入りぬ

二十五日 石門開封再賦黃河

大行は朝のくもりの中に見え樹はかぎりなし東の平野

高粱に粟にまばらになりし葉を怪しみながらこの民を思ふ

白楊柳棗臭椿とやうやくに樹の種類多く桐の大木あり

耕せる國平かに野の花の目に立つものもなくなりけり

七一

或る所は見ゆる樹もなし高粱の穂のひといろ一色のただ遠くして

七二

赤き旗白き旗して追ふ見れば蝗いはいこの國に食ひ入らむとす

高粱に粟ひとはに一葉の残るなし目の及ばざる涯はてにつづけり

小さな布ぬの振り或あるは畔あぜに踏む國を食ひつくす蝗を追ひて

磚窯せんえうのあと墟きよの如く並べるもただ青きゆく心よらしむ

見え居りし曠野ひろのの中の丘二ついまは隠らふ棉わたの畑に

鋤すき一つ並び曳きゆく牛と馬互に目がくしはてしなく行く

帚草ははぎくさ丸々茂り紅葉もみぢせり吾がふる家のいにしへのごと

七三

やうやくに檉柳ぎょりうの楚樹しよと目につきて黄河沙丘さきうに進み入りたり

水上みなかみに花のはじめを見來りてここに檉柳の花終りなり

なびき合ふ柳の白き夕風ゆふかせに黄河を南に渡らむとする

一穗ひとほなく蝗の食ひし粟稈あはがらを沙すなの上より集めつつ居り

草生おひぬ長き堤つみにそひ行きつつひに何方いづへに黄河をわたる

堤防ていぼうはきはやかに陰影いんえいをあらはして棉を集むる人等立ちかがむ

沙丘あり幾重いくへかの古き堤防をよこぎりて行く黄河渡るべく

堤防を切通きりとおし入る黄河跡豆あとのしげりははてし無く見ゆ

小沙丘瀬波のあとを見るごとし黄河本流全く涸れて

沙の波川上遠くつづきたり夕日は靄にひくくして

草木なき一直線の地平にして夕靄に鳥の群の落ちゆく

川下もまた限りなし暮色のこめたる方に沙の波つづく

舊黄河渡り終りて水溜るひる藻の花も夕影ひけり

二十六日 開封

鐵塔に蓬のそよぐ風ありて天の深さは限り知らずも

青き空見れども飽かず十三に重ねし塔の陶てりながら

暑き日は陶の佛にてりつけて鐵塔風鐸のゆらぐことなし

七八

新しく建ちし成尋の石文あり黄河の沙を平めし中

年老いし母の嘆きを負ひ持ちて遠く學びし阿闍梨をぞ思ふ

吹き來る沙のいきほひは北壁の磚を覆ひて城内に入る

いにしへの残れる跡をめぐる池岸に群集して衣をそそぐ

若き男女廟のかけにて物食ひつつ道を開くも親しかりけり

廟一つ古き宮址に高く登り黄河の方に柳かぎりなし

古にこの汗をすぎ長安に往き來し憶良いかに行きけむ

七九

雪の道に足を埋めし聖のことなぞらへて吾は憶良を思ふ

行きがたき西を遙かに見さけつつ憶良思ひ慈覺智證を思ふ

南京雜歌

花蓮はなはちすいまだのこれる紅くれなるに夕日さしそひ浦口ほこうは近し

青くわうまき黄麻くわうまなびきてすぐる晝の風暑みちしばき道芝の上つたひゆく

日の入りし國はてしなしいつまでも靄に残れる朱あけの見るべく

桶洗ふ水は淀める青みどろ姑娘をめぐる白き鶯白き鴨

磚の上に老いたる纏足よろめきて石榴を捧ぐ透ける其の朱

巷より巷につづく臭き氣のしかも誰が家ぞ蘭の香ながる

櫟林も楓林もいまだ青ければ下草より撫子をあつめて遊ぶ

とねりこ楓實の垂りたるも心しむ北より南に樹を見つつ來ぬ

花乏しくなりたる蓮に風吹きて白き舟の人を覆ひつくさず

秋づきてなぎの青花いさほへどなほ高く保つ蓮のくれなゐ

湖ひろく匂とどむる紅をこころに持ちて南京を去る

歸り來て玄武湖の末枯に舟にのゝなほ青き葉をもぎ去る時に

八四

池水にすぐ立つ城壁の美しさもそこに蔭なす叢も見つ

日に焼けて枯れたるあさぎ霜にあひし如くも見ゆも風さびしければ

咲き盛るなぎの花莖高くなり照る日親しき今日の晝すぎ

七月のふふめる朱を見てしより青き葉乏しむ玄武湖の上に

打ち靡く柳に秋の色見ゆる平凡にも感傷し立ち居り我は

雨の降る體菜畑の間ゆき石榴を二つ買ひ歸り來る

かぐはしく煮たる青菜に漬けし菜に足りて休らふ昨日も今日も

八五

浴ゆあみの後のちシャツそそぎつつかなしめり伯母をばが盥たらひに洗あらひし日のこと

遠く來て食しよくをつつしむ明け暮れや夕べは早く腹減へる覺おぼゆ

貪むさぼりて食くひし蘇州そしうの排骨麵碗はいこつめんわんかへしことも思ふに樂し

吾れ口をつつしみて行けば木この下もとに沸たぎる油より引き上げ食らふ

罐かんの中に残りのありし茶を飲みて漢口に飛び行かむ日を待つ

紅くれなるの穀かぢの實は落ち蟲集あつまるを人はすくなし博物館の午後

横はる北齋河清ほくさいかせいの佛碑像埒ぶつひざうらちをこえ兩妻の名のところを撫づ

この國のゆたけさ古いにしへいまも見よ大甕おほみかに青き釉くすりは流る

江南雜詠

九月八日九日 蘇州

千萬花雲ちよろづはなとたなびく朱あけも見みき蒲がまの中なかなる今日けふの一ひと花はな

池いけめぐる君きみに従したがひ磚せんとんを踏ふむ瞿く園えんに菱ひしのうづだかき夕ゆふべ

鴨かひ五六羽ろくははしたたく潦はみづの門かど入いれば古ふるきを保たもつ池いけをかこみて

聲こゑ上げて菱あしとる少女をとめ二籠ふたかごに盛もりたる菱あしに水みづそそぐ少女をとめ

楓あきの木きの少し衰おとろふる所ところすぎ臘らふばい梅うめは石いしに寄より青せい々せいたり

蓄たくはへて卓しよくに置おきたる銅陶どうたうをないがしろにし閨帳けいちやうのぞく

つづき來る洋車やんちよの客あふご横へ鯉籠いりかごにして市場いちばに走る

積み上げし體菜たいさいの莖青し青あざし萍うきくさの下より水汲みそそぐ

大まかに稻作いねする民等菱ひしの實を採つみて丹念たんねんに其の葉を整ととのふ

菱ひしを植まふ眞薦まこも培つちかふかたはらに稻穂いねほは多くずる蟲に白し

溝狭みぞく架かするに拱高きやうかうき石の橋朝いほの諸いもは煮えて鍋なべにあり

古より食貨しょくくわのことを重おもみして殖ふえたる民等道たみどうにあふれ食ふ

彫えりし文字もじ放はなちし糞ふんの遍あまねき國感心こくかんしんしつつ詣よづ孔夫子廟こうふしべら

夫子廟ふしべら磚いしの間の草短くさたんかかれど回廊くわいらうの山羊等やぎら養やしやふに足る

山羊の糞やさしちひ小さし牛の糞の山なす避けてべうない廟内に立つ

九二

名を留とどめ形變れる蘇そ氏しの家保安兵ほあんへいあり朝炊かしぎする

型の如く壁に沿ひゆく遊廊いうらうあり樓ろうに到りて甘藷かんしょの畑はたけに對たいす

さまざまの園そのをめぐりて飽き足らぬ心はよりぬ四五しご株かぶの小竹ささ

たわみたる竹の下土したつちうるほひて秋の日ざしも避くべく思ほゆ

園ふかく遊びて何か談るらむをみなの聲石の船にこだます

院子あんずふかく竹をめでたる親しさや竹垣たけがきを結ゆふ青き太き竹

虎邱鎮茉莉の花の花市はないちにすてたる花を掬すくひて拾ふ

九五

茉莉の花踏みゆく鎮の賑ひに
葦の花莖東ならべ賣る

九四

傾ける塔もあやぶまず集りて
茶は花かをり西瓜子を售る

紅の角をひらけば淡雪の齒に
こころよし虎邱の菱の實

清やかにいろくづを籠に並べたり
夕川に浮かぶ柳の葉とも見ゆ

乗合の民船すぎし運河よどみ網して
光る白銀の魚

いにしへに練の如しと歌ひけり
楓橋の方に夕べ光る水

上海

静かなる自然科学研究所すでに
應召不在の研究室あり

九五

魚の色變る映畫をしばし見つ限りなき眞理の入口の如く

ずる蟲のことを尋ぬとさまざまなる治蝗の書も見せて貰ひつ

君ここに永く勤めてよき妻よき子等黄浦江の鰻焼きでもてなす

吾が見てもがらんとしたる此の寄宿舎適當に飲む位ゆるし給はれ

さびなどを日本の文學と思ふなよただ假聲と身振なきのみ

立ち向ふこれも國籍不明にて吾は言葉を發するを待つ

九拜する姑娘の後に吾が籤の上々を得て靜安寺を出づ

鱧魚扱ふ湖心亭前のきたなさに蘭蟲の背のかがやくを見つ

老松盛桂花らうしょうせいけいけいけいはいまだ陳ふるくして落ちつさある香かに蠅あつまるのあつまる

吾がかくしに手を入るるばかりつき來るを内山老人蹴とばして追ふ

流言りうげんの中を游あそげる如く來ていくつかの流言りうげんを交易かうえきし行く

蓮蓉月餅れんようげつぺい百六十元の並べるを指をくはへて居るわけでもなし

食しょくを追ひ有るを保たもつに苦しめばなよなよとして爪つめを塗ぬる

髪かみこまかに巻まきて爪紅つまくれ夕ゆふされば永安公司えいあんこうしに立つにやあらむ

かへり來て疊の上をたのしみつつ君等國際の波なみに堪たふるや

九月二十一日二十四日 杭州

南して家の日本に似ることをどの日本人も必ず語る

軌條積むかたはらに壘の芯を置く乏しくここに日本人あり

西日さす西湖の秋の暑くして二花目立つ蓮のくれなる

吹く風はほこりを巻きて暑けれど蓮の上よりかをり來るもの

この湖を戀ひて見ざりし古人思ふ雨の中より柳に夕日さす

吾が卓に柏と共にある曼珠沙華吹き入る風は嵐ならむとす

赤松の幹に雨ふる親しさよ日本より長くしてなびく松の葉

斑鳩に似たりと思ふ鳥鳴きて昨夕も今朝もしきりにきこゆ

栗のいが青さ裏山は石積みし臺榭のあとの幾段にもあり

1011

日本の小さき池をなぞらへて戀ひしいくその人等思ほゆ

朝よりさこゆる日本語を背にして霧の下り來る西湖に向ふ

夕日赤く照りつけたりし今朝にして霧にこもれる杭州城市

牡丹色の洋服著たる妻つれてホテルの坂を上り來る華人

窓ささを黄鳥ひとつとぶ見たり霧はやうやく高からむとす

呼ぶ聲は水鷄の如し湖の上に近づく山にこだましてきこゆ

柳蔭に芋の葉青き院公亭親しみぞゆく霧のこる湖

1011

104
茨^{みづぶき}の鬼蓮^{おにばちす}なるを確かめむ舟人^{ふなびと}をして舟めぐらしむ

浮きいづる茨^{みづぶき}の實を拾ふ吾西湖の水にもろ手を浸す

この朝西湖の水の清くして手を入るる下に泥うごく見ゆ

三潭^{さんたん}の石燈籠^{いしとうろう}も秋の日の霧くだる日に見つつこぎゆく

105
余^よ青年^{せいねん}吾^{われ}が筆談^{ひつだん}に日本語の答^{こたへ}する交通公社の舟の上

泥にゐる螺子^{にし}拾ふとふ舟一つこぎ分れ蓮^{はす}の茂りにかくる

見はらしの島に占めたる何の墳石^{つかせき}桂石^{けいせき}石人^{いせきじん}の草むらとなる

上海の煙草屋陳^{ちん}が陳莊^{ちんさう}はコンクリートに少し蔓^{つた}かかりたり

千五百ありし雲水うんすゐ今減りぬ米高いですと余君よくん説明す

水みくさの花白く浮けるを余君に問ふ利民草りみんさうと鉛筆えんぴつにて答ふ

西湖の菱は名高いですと羞すずむれば汗流あせながし割る青き赤き刺長とげき刺無とげき

芟みづぶきをそれと確め得し今に延喜えんぎの式しきを思ひつつ居り

湖うみの中に更につつめる浅き池三潭印月さんたんいんげつをここに見るといふ

鳩には一つ浮藻うきもの上に首を振る大和やまとの池を思ひいでつも

博覽會紀念塔の湖中に立つなどは餘り氣にせず吾は西湖をめぐ

竹生おふる丘にぬるでの花咲けり向へる吾は日本を思ふ

岳王廟いでて上衣をぬぎ持てばかをり新しき銀桂の花

立ち並ぶ精舎の前を湖に出づ野分立つ空に光る夕月

湖の上に野分の吹けば舟は歸り漾ふ水泡石垣に寄る

菱の殻日にかわきゆく香も親し夕べ人去りし湖の岸

二朝をわが枕べにかをれりし蓮の朱もあきてかゆかむ

西冷に夜もすがらなる蟲が哭を三夜ささて吾去りゆかむとす

南京雨花台

戦たたかひの後のち大きなる平和あり驢馬ろばにのり驢馬ろばを引き民絶ゆるなし

長江ちやうこうは青くにははき國原くにばらにひとすぢに最もつとも西てんは天てんに光れり

散兵壕の跡墓原につらなりて秋萌もゆる草青あをあを々と見ゆ

丘の上のゑのころ草もほほけ過ぎぬいづ方へに向きてみ靈たまを呼ばむ

歸りゆく驢馬ろばの一群ひとむれ數ふるに十五六頭じふご ろくとうにして又次つぎの群ゆく

中華門西ちゆうくわもんの入口いりぐち見えながらほこりをあぐる門外もんぐわいの街まち

繕つくひて白きところある城壁も集つどふ民船みんせんも秋あき日和よりの下した

紫金山空にくきやかに静まればただ安らけし迂回る南京の城

麓あかさ白き洋風の家々は獅子山の方にあつまりて見ゆ

吳王夫差の古の跡清涼寺石頭城ただ現前の大きな平ぎ

石しろき中國戦歿將士の墳草には咲ける撫子の花

いく所か賑ふ衢とほりぬけ秋されし莫愁湖にめぐり出づ

蓮の葉の秋の葉とりて束ぬれば蓮の葉にほふ院子のうちに

湖への古りたる寺の學校に米を持ち寄り生徒學ぶなり

湖に向き喇叭習ふと若者等吹きなす音は城壁に訝しかへる

江北山東雜詠

一一四

長江の風ぎたる上にかへり見ぬ日いづる紫金山幾日親しみし

こひ願ひ望みし漢口行きがたし朝の江を北してかへる

宵々の西の光に思ひかけこひし漢口つひに行きがたし

たたなはる草野はてなく白き馬草のいろはやや秋ならむとす

丘の間に稀々澄める川ありて鶏の血のごとく紅葉する草

川原に細石あることも心ひく石の間に短く紅葉する何草ぞ

齊の國魯の國を再び往き來して柿紅葉しげき村々に逢ふ

一一五

はてしなき土にほのかなる萌黄もえぎあり麥を早く蒔き麥の芽の出づ

草短く惜しみて煙けむりを立たしめず秋かげろふの國になびく夕べ

土あらはに煙を惜しむ國ゆけばただ一筋ひとすぢも心よるもの

秋の日の静かなる國のしたしさを何にも足らぬ煙の立たず

聖ひじりうま生れ賢かしこき人のつづきいでて衰州えんしうを歩む皆君子くんしに見ゆ

この巷ちまたまことある妻をあらはして牌樓はいろうの石朽くつることなし

麵めんを食ふ吾を窺のぞく者仁じんを好めるか終をはるをまちて器うつはあげ寄る

諸いもの葉に霜の來りて魯の國のはてなく乾かわく野に麥を蒔く

火車くわしやとまる曲阜きよくふの站たんに布子ぬのこ光らし賣り居る見れば浮雲ふううんの富とみならじ

泰山たいざんの黄きより紫むらさきに變りゆく夕日の時に泰山をまはり行く

泰山を朝あさの光に見し時もこの夕時ゆふときも空はただ澄みに澄む

頂すたぎの廟べうのかけりの見ゆるまで澄める空氣の中にいかしき泰山

黄草嶺くわうさうれいの村つくりに繕をとめふ少女見つ鐵路てつろより低く嶺みねこゆる古き道

家々は穀打こくちいそしみ幼等をさなは聲を上げ夕日の界首かいしゆせん村

井みを汲むに轆轤ろくろひびきて人つとむ乾かわける國に菜を作るべく

唐國からくにのここを涯はてとし日本にっぽんへかへる風まちし古思ほゆ

磯による白き波あり小松あり日本の方に海かぎりなし

海を占め丘に亘りて市街を成す計畫大きくして海東に臨む

返り咲く榎垣ある海の道調高き日本語に柴生田少年を思ふ

水なくして粟植うる民港臭くなるまで海に捕りて魚を食ふ

池なせる瓶に貯ふる鹽の汁こそろこそろに醬蝦をかきならす

海はなれ幾時か來しと思へるに草野の中に白き鹽の塚

天津淹留吟

一三三

十月十六日 早朝天津着

七月の暑き北京に別れたる友とあふ無事なるも自らうれし

東京より臼井令息が届けてくれし真綿の下著したぎ早く著るべし

七月六日夜のほどろに送られて十月十六日夏服なつぷくを更ふ

渡邊直己戦死のあとを見すといふ鹽しほふく土を踏みてつきゆく

十九日 太沽鹽田見學

潮落つる白河はくがの濁り渡りゆく空に一つらの雁かりも見るべく

一三三

河岸かはぎしに堤つみをなせる白き鹽しほにごりを越えて親船おやぶねにつむ

大きなる船につき當りゆく濁り濁りを切りて鹽しほつみ來る小舟こぶね

一筋ひとすぢに運鹽溝うんえんこうのとほれば老おい幼せさな女等をみならも鹽舟しほぶねを引く

父母ちちははは舟ふねに舵かぢとり棹さしさして鞋くつはく少年せうねん引綱ひきづなを引く

雨あめすぎし岸かたの黄土くわうどを踏ふみかため幾百いくひやくかへり引くや鹽舟

船ふねばたに水みづかぶるまで鹽しほつみて重おもきは二人ふたり三人みたりして引く

廣々と鷗かもめあそべる溜ためりより幾段いくきだすぎて潮しほは結晶池けつしやうちに入る

手てをいれてやや温ぬるき結晶池けつしやうちしづく結晶けつしんをつかみ上げて見る

寒々さむさむと風はくもりの下した吹けど岸にしらじら鹽凝りこそめつ

凝りしづく鹽つぎつぎを次々にかき集め残れる苦汁くじゆは導みちびきあつむ

國人くにびとよ鹽を憂ふ勿れここに鹽あり採りて盡さぬ鹽田あり

宮坂所長は諏訪山浦やまうらの人なれば塚原淺茅先生つかはらあさぢのことも話し合ふ

濁る色は土に波立なみだつごとくにも渤海ほつかい遠く天てんと相寄あひよる

傾きて又立つ白き帆が一つ風はにごりの海より吹きしきる

海水うみみづの色土の色に同じくしてつらなる中を渚なづみの白き鳥

大揚水場だいやうすゐぢやう今日休みにてポンプ口ぐちに重かさなり合あひ鯿はらのあつまる

鹽田よりややしばらくは草を見ず松菜の紅にあふもうれしも

風車立つ古き鹽田も廣々と新しき代に立ちかへりたり

二十一日 相澤正君戦死の報上村君より到る

望みつつ吾が行かざりし漢口に戦ひ死にしか相澤正

思ひつつ朝渡りし水上にすでになかりしかああ相澤正

南京に或る夜目覺めて胸さわぎ君を思ひきたただ會ひたかりき

漢口に行かざりしことを又新に悔いくやしみてただ君を思ふ

夏ごろも寒さを行きて君がなき山川だにも見るべかりしを

顔しろき生徒なりし日より短かからず共に食ひ共に飲みにしを

酔よひすぎる君を或る時は怒りにきしみじみとして今朝一人思ふ

二十四日 天津市中

鼓樓よりくだり目につく尋たづね人の貼紙はりがみの文字感心して去らず

鍋の中に頭かしらならべて煮られたる鯉あぶらの脂も立ちとまり見る

押し合ひて小鳥こどりを賣れる巷里かうりあり糶せるものは自みづからの聲をたのしむ

杖つゑの上に雲雀ひばりとまらせ人を分くる少年せうねんとも大人おとなともつかぬ一人いちにん

蜘蛛くもを賣ばいる業なりはひあり玉蜀黍の幹より蟲を割り出すなりはひあり

群がれば飽ける飽かざる各々に著て食物並ぶ前をゆく

大胡同の薬の老舗行きなりに抽出をぬく王さんは此所の持主なり

日知録の版々のこと教へくれし王さんは支配人と薬の値を話し合ふ

油鍋にももの揚がりゆく間待てり繡ある鞋も幾人か通る

二十六日 国際クラブ

塙の間に蒲公英の秋の茂る葉を食に連想す飽くまで食らひ來て

萩の穂の風に吹かるる池の邊に日本のごときさびしさを見つ

吹く風は菖菘の實をならし吹く菖菘もいくらか日本と異なるか

枯草の中に噴きいづるアルカリをぼろぼろに踏み又枯草の上をゆく

續南京雜歌

石だたみの雨のなごりを踏みて上る中山陵の秋の紀念日

中山先生遺骸安置の白き室ともしかがやく日に來りあふ

限りなくつづきて丘を上り來るは中山陵參拜の青年少年等

もみぢしてとぶらふ國民革命烈士の靈れいそれを助けし日本志士の靈れい

日本志士山田良政君をかなしみて孫文自ら立てし碑も見つ

紅くれなるも黄きもまだ青さも匂ひ立つ靈谷楓林れいこくふうりんに再び來れば

晝すぎになりてにぎはふ中山陵もみぢかざすは少年少女せうねんせうぢよ

吾がこのひ青色衣綿あをいろじろりわた入れて少女をとめはならぶ哀悼の雨の中

何時いつの間に黄麻くわろまは引かれ道芝みちしばの實の散る中山路山羊ちゅうろざんろやぎの一群ひとむれ

博物館の木ぬれも少し秋ざれて蟬ともこほろぎとも分かぬ蟲のなく

うづだかき香かぐの木の實みの耀かがやきは長く親しみし雨のふる山西路さんせいろう

體菜たいさいはつぎつぎにのび茂れどもかさねては來ぬ吾とぞ思ふ

續北京雜詠

立つ人を隠かくさふまでに紅葉もみぢして匂にはふ荻原あしはらはてしなく見ゆ

草もみぢ限も知らぬ國原に少しおくるる柳のもみぢ

黄なる葉にやや沙を吹く風立てる北京外城ぺきんぐわいじやうにかへりつきたり

北京城はなにに故人こじんにあらなくに涙にじみて吾は近づく

百日ももかほどの旅の旅行き歸り來て秋の青菜あそなのゆたかなる時

變るなき北京べきんせんじやう博城の色に向ふ暑き南に日を過ごし來て

ゆさゆさに成れる槐ゑいの實にすぎて黄なる夕日の中歩みゆく

博の庭ひろく枯れたる草の穂にほのぼのとして日は西渡にしわたる

宮すたれ多く閉ざせる殿とのの前葉を早く剪きりて牡丹を圍かこふ

一昨日おとつひは藁もて牡丹かこふ見き土を寄せたる今日の親しさ

劍南けんなんの花木くわぼくもいまだ落葉せず柏はくの木蔭こかげは寒々さむざむとして

塙まの間に青あき苦菜にかなの冬の葉を惜しみつつ壁かべに沿したがひ塙せんの廊ろうめぐる

再び來て立てる世祖せいその御書ごしよの前形かまはぬ寛ゆたかさしたしく

海西かいせいの畫工ぐわこう筆もて馬を寫す寫すは東西とうざいによることなし

すたれゆく美しき薨滅いらかはろぶるもの常かくのみと底そこひなき空そらの下した

葛つたもみぢわづか残れる黄緑くわろりよくの薨いらかの軒のきを吹く風のころ

限かぎなしと吾は幾度いくたびか言ひあらはす眞まことに限なし南護城河柳みなみごじやうがの黄葉もみぢ

青柳黄あをやなぎに變りゆく色にして空を押しへだて限なき並樹なみき

煙けむりのごときいさごの中に下り立ちて柳黄葉やなぎもみぢと吾とあり

いそしみて乾^{かわ}ける土に麥蒔^{まき}けば冢^{つか}ちのづから小さなるもよし

枯草^{くそう}をかく小輩^{せうはい}を見て立つに上衣^{うはぎ}をぬぎし吾は汗ばむ

歩み去る十三簷^{じふさんたん}の塔^{たふ}の下^{した}いよいよ遠くいよいよ秀^{ひい}づ

大きなる塔に並べる小さき塔名知らぬ塔を幾かへり見つ

ほろびゆくものを尋ねて草一つ生^はやさぬ觀^{くわん}の庭に來り立つ

長^{とこ}しへのわかさを欲^ほりて人の寄れば觀は豊かに柏^{はく}そびえたつ

蕪^{にら}畑^{はた}は霜がれたればアスパラガス青^{あせ}き畔^せに居^をり柿を食ふ

茶を賣るに莫^{ぼく}談^{だん}國事^{こくじ}といましめて駱駝^{らくだ}追^{おひ}も洋車^{やんちよひき}引も休^ひみ處^どとなす

身をすぐす之を業なりとし貧しくば貧しき中にかをる茶をめぐ

いづくまで續つく槐あしの並木なみぎなりや到りてうれし答こたへある門かど

君がため春不老しゆんぶらうしゆり雪裡紅ほんを確たしかむと朝陽門てうやうもんに朝市あさいちを行く

吾が友は少々せうせうぶうまい不賣ばいの雪裡紅ほんの一束ひとたばを負ひ吾に先だつ

鯉こいこくの話しながら突つき見る日本より長めに金色こんじきに光る鱗うろこを

ゆたかなる朝の市かな立つ客きやくの指ゆびさすに随したがひ猪肉割ちゆうろうまかる

人あれば食しょくのともなふ理ことわりを塵芥ごみの中より青き葉を拾ひ取る

銀杏ぎんなんの木の下したに銀杏の黄葉もみぢ散り中海ちゆうはいをこえ日はかすみたり

長き間^{あひだ}吾をみちびきし友二人中海の午後に別れむとする

茶も終り南京豆もつきたれば橋渡る人を數へ君を待つ

黄にそよぐ夕べの柳夢なれや寒き南海^{なんはい}より人のぼり來る

古^{ふる}きものかぎりも知らず池の中の廢^{すた}れし跡も一夜^{ひとよ}寝るべく

公園も寒くなりぬと談りつつ日本に見ぬ金魚を書きとどむ

吾等やすむ午門^{ごもん}の前の塙の上^{かりやす} 苜蓿^{かりやす}に似てやさしき草の穂

小さなる穂に絮^{わた}をもつ草一本^{ひとつもと} 塙の上にはその影がある

鎮^{ちん}の市^{いち}に塗りたる赤き櫛を賣る竹こまかにして南常州^{じやうしやう}より來るもの

城外の秋もすぎぬる日の光並べる柿は熟しすぎとほる

一五〇

冴え冴えとほこり静まる夕べにて茨たるる合歡に残れる光

前門ちえんめんより天橋てんけうを二時ふたときばかり導かれ錆びし鍵かぎ買ふ合ふも合はずも

君が家もいまだ焚たかねば外套ぐわいたう著て日本と支那のこと語り合ふ

古ふるを語らふ前にあひ通ふ心も今の時に少しくけはし

三寒さんかんの今日のはじめの沙の風青さもみぢも槐ゑいの落葉おちば

以上五百四十七首

一五一

菲菁集

昭和二十一年七月一日 印刷
昭和二十一年七月五日 初版發行



定價七圓(稅共)

著者 土屋 文明

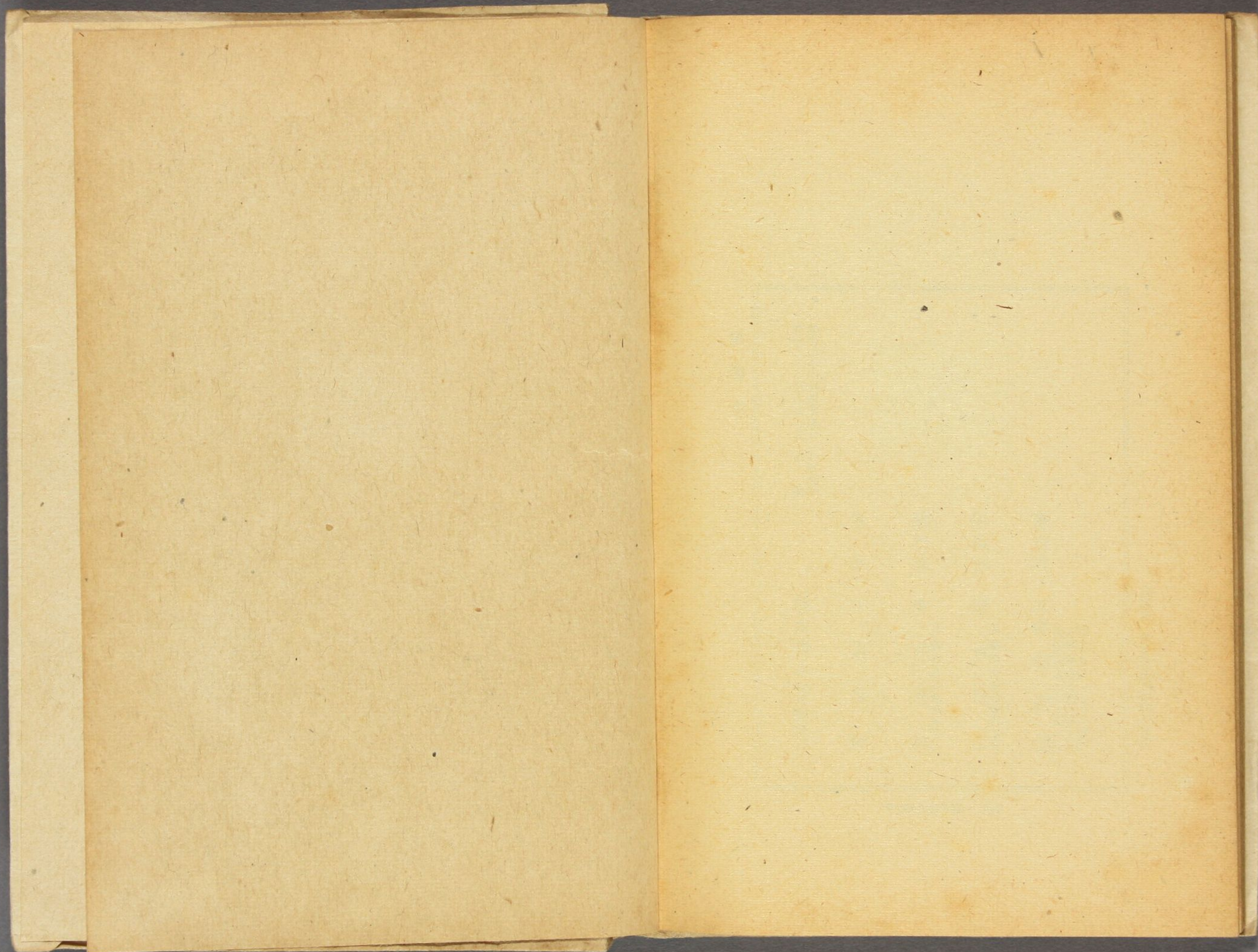
發行者 米岡 來福
札幌市南八條西五丁目

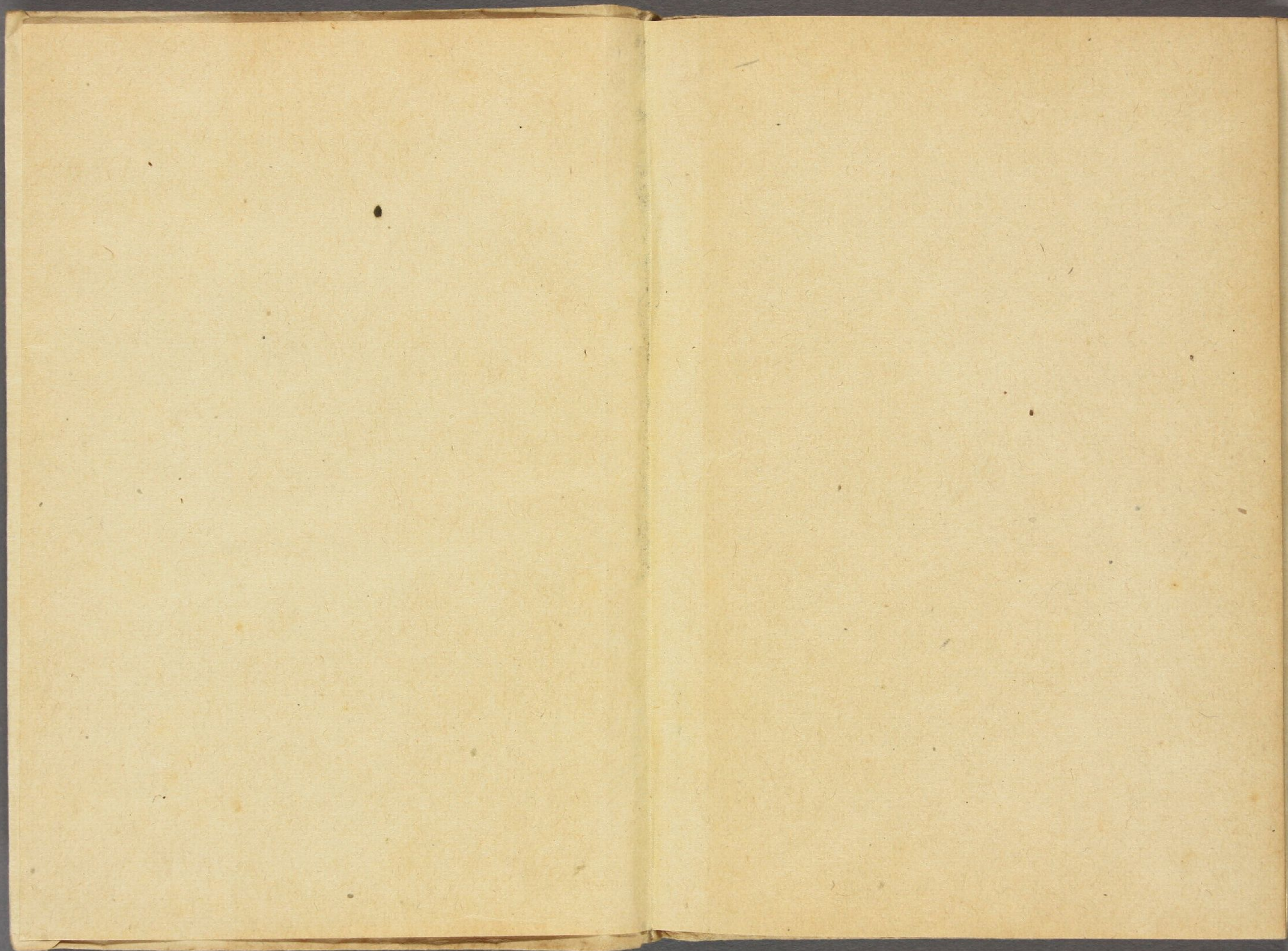
印刷者 鹽野 恒吉
札幌市北四條西六丁目

發行所 札幌 青磁 社
會員番號A二一九二七
札幌市南八條西五丁目
振替小樽一〇六一〇番

配給元 日本出版配給株式會社

本製・刷印堂水其野鹽





葦菁集正誤表

頁	行	誤	正
一四〇	四	すぎ [△] て	すぎ [○] て
一五一	一	語らふ前 [△] に	語らふ時 [○] に